第３２号　令和５年１１月１４日

校長室より

「二松から飛翔へ」

二松学舎大学附属高等学校
校長　鵜飼敦之

今日は何の日　“11 月 11 日”
～ウクライナ戦争の終結はいつ？～

「11 月 11 日は『ポッキーの日』とか最も記念日が多い日だそうです。ご存じでしたか？　実は、『世界平和記念日』でもあります。1918 年に 4 年余り続いた第一次世界大戦がドイツとアメリカの停戦協定で終結した日でもあります。ヨーロッパでは祝日としている国が多いようです。」と、国際政治学者の合六教授（二松大）が紹介してくれました。

この日、二松学舎大学国際政治経済学部主催の公開講座『戦争と国際社会を考える　歴史を学び、生きる力を高めるⅡ』が中洲記念講堂で開催されました。昨年の文学部公開講座に引き続き参加してきました。会場は満席で、最前列には高校生・大学生が陣取り、本校の生徒の姿もありました。若い世代に戦争について、考えて欲しいと思います。

内容は、二松学舎大学名誉博士で元国際司法裁判所所長の小和田恆氏と東京大学先端科学技術研究センターの小泉　悠氏の講演、そして二松学舎大学国際政治経済学部教授陣のトークセッションという構成でした。

小和田氏は「『歴史に学ぶ』とはどういうことか」と題した講演で、「簡単に歴史を学び、未来を生きると言うけれど、戦争最中に同時代を生きる人に、その戦争を評価するのは難しい。」と指摘されました。小泉氏は、ウクライナ戦争の行方を理解するにはロシアの軍備を研究することが必要と言い、日々、ロシア軍の新聞を読み、論文の執筆＝「書くこと」を通して、考えをまとめていると主張されていました。また、ロシアのプーチン大統領の考えを知ることは出来ないとも話されていました。

後半のトークセッションでは、「ポスト冷戦で世界中の人々がまさか戦争は起きないだろうと考えていた。しかし、ウクライナなどがロシアから独立し、ロシアの一人負けの状況下、ロシア人から見たプーチン氏の言動は、救世主とも映っている。」と解説されていました。Q&A コーナーでは、ロシアとウクライナの戦争はいつ終わるのかとの質問に、パネラーの講師からは、プーチンの真の戦争目的が分らないため、到達点が見えず、残念ながら戦争終結は先になるだろうとの見解が示されました。また、高校生から国連の存在意義（ロシアの拒否権発動を指して）について、鋭い質問が飛ぶと、「安保理だけが国連ではない。」、「総会ではロシアの行動を否決している」とも紹介され、国連の在り方についての考え方が示されました。すると、客席で聞いていた小和田氏から「無いよりはあった方がマシ的な意見だが、（自分は日本の代表でも、国連への影響力もありませんがと前置きをした上で）、戦争勃発時や初期の段階で国連事務総長の介入が期待された。」と持論を述べられていました。会場からも小和田氏の発言に、納得ともとれる拍手が送られていました。

ウクライナ戦争、そしてパレスチナのガザ地区でのイスラエルとハマスとの戦闘など、我々にできることを考えてみる機会にしたいと思います。

“一丸　本気戦（マジバトル）”

外は木枯らし 1 号が 3 年ぶりに吹いた東京でしたが、府中武蔵野の森アリーナは、寒さを吹き飛ばす熱いバトルが展開されました。バレー・バスケ・ドッジボール・フットサルと種目も昨年度より増え、リーグ戦形式で実施された今年の球技大会は、文字通り熱い戦いが繰り広げられました。

バレーは volley ボールの名の通り、ボレーでの返球が求められます。ボールを地に落とさず繋ぐのはかなりハードルが高いのですが、レシーブ・トス・スパイクと本格的なプレーを見せるチームをありました。バスケットは、3 ポイントシュートは見られませんでしたが、ゴール下でのリバウンドの攻防戦は見応えがありました。午後に行われたドッジボールは、各チーム戦術を駆使し、早々に勝敗を決めるチームが多かったようです。男女ともスピードボールで相手を撃破するシーンが度々見られました。フットサルは、細かな足技で限られたスペースを縦横に使い、細かなパスをつなぎ強烈なシュートに至るといった場面も多くあったようです。

競技をする者、応援する者が一体となって楽しみ、汗をかいた一日でした。スポーツを楽しむとともにクラスで協力することも感じる機会となったでしょう。

大会を支えてくれた部活動の皆さん、そして、生徒会、体育・学級委員の皆さんの企画・運営に感謝し、今年の球技大会が成功裏に終えられたことを讃えたいと思います。お疲れ様でした。

また、150 組を超える保護者の皆さまにご観戦いただきました。生徒たちの元気な姿をお届けできたと思います。また、父母の会からドリンクの差し入れもいただきありがとうございました。